

セッション 1 : CPT-11

小林 英 夫

防衛医科大学校第 3 内科

塩酸イリノテカン(CPT-11, カンプト™, トポテシン™)は 1983 年に我が国で開発され, 1994 年に製造承認となった. 本剤は, I 型 DNA トポイソメラーゼを阻害することによって, DNA 合成を阻害する. 殺細胞効果は細胞周期の S 期に特異的であり, 制限付時間依存性に効果を示す薬剤である. 当初はマスメディアによりセンセーショナルな取り上げ方がなされたために, 一般臨床への導入にためらいが生じたかもしれないが, 他の抗腫瘍薬に比して有害事象が極端に高率なものではない. なお, 1997 年と 2003 年に厚生省から安全性についての情報が発表されている.

本セッションでは, 大阪市立大学工藤新三氏と長崎大学岡三喜男氏により, CPT-11 の教育講演が行われた. 次のセッションでも報告されるが, 日本で開発された CPT-11 は日本での臨床検討により, 小細胞癌における標準的治療としての位置を確立した. 非小細胞癌においても優れた成績が報告され, 肺癌治療の重要な柱となる薬剤であることが理解された. また, 当初危惧されていた下痢については, 塩酸ロペラミドなどの支持療法に習熟することで対応可能であることも報告された.

セッションでは扱われなかったが, 毒性低下をめざした合成カンプトテシン誘導体の開発も進行中であり, 本セッションの総括として, トポイソメラーゼ I 阻害薬は肺癌治療のキードラッグの一つとして今後さらに期待される薬剤といえる.